

沼尻 絳一郎 編輯  
西南太平記

十三号

下



10

15

20

25

30



A 439  
10

西南太平記十三編卷之下

東京 沼尻絰一郎編輯

第廿六回

逆將桂四郎日向路へ兵を募る  
鹿兒島の商田邊為太郎最期

鹿兒島の兇徒、既本縣にて開戦せし將、  
惣軍歸縣して持久の策とたつる所、  
として日隅の間、大兵と弄まるとの地、  
水股峠、三太郎邊、又出沒して、  
屢々官兵と抗撃す。

西南太平記

十三編下二

48-7801



一の長驅して豊後地又出て去る蓋し十四日  
 ふら竹田佐伯へ侵入あり亦巡查を別府へ出  
 張りたりた一等の電報の追々聞ゆるところる  
 り佐敷口の旅團の戦ひ日々利あらずして逆  
 勢の去る十三日の朝馬見原に激戦し二十三  
 四人の官軍の為に斃さるしりども官兵も  
 又死傷ありと爰を以て考ふまは逆徒を退  
 く道のるき故又死と決して唯その進むは任

せて所謂猛猪の省るを知らざる者の如し此  
 威の开も何れのとに又挫折せんり逆徒の慄悍  
 むる今猶輕視をべかざるあり又去る四月一日  
 三の嶽進撃の節又三等巡查佐藤卯吉が  
 存候さきにて暴徒二人又出逢ひ烈しく戦て  
 一人と斃し其懐中より分捕たる逆軍隊長  
 人名録ありとて得たるまゝ又因りて記載  
 せる左の如し



西郷小兵衛 松田權左衛門 川上與一

林七郎次 長崎金兵衛 加世田彌八郎

鷲の木郷左工門 西高原之丞 長善場虎藏

岩切喜次郎 橋口吉左工門 淺江直之進

竹原半兵衛 福崎彦十郎 日高佐八郎

永田彦兵衛 飯禮休左衛門 林昌助

坂元申太郎 小倉壯九郎 久留休右衛門

木村平左衛門 兒玉矢八郎 澁谷郡助

松岡岩左工門 鮫島四郎 郷田伊之助

山田半左工門 相良吉之助 堀新十郎

成尾哲之丞 兒玉十郎 山内次郎

相良雄之丞 高橋直次郎 水間新七

森岡長左工門 山口孝右工門 谷元良助

大河平武助 石塚長左衛門 松良與八郎

澁谷誠一 篠崎七兵衛 脇田喜藤太

野村忍助 堀與八郎 川久保十次



伊地知彌兵衛 吉富郷之丞 木原慶助

堀十郎左衛門 大河平源助 肝付直左工門

坂元 仲平 永山 休二 松永清之丞

山口孝八郎 川野喜八郎 渡島直次郎

池田吉之助 平山七郎 前田新助

松下助四郎 石原市郎左工門 重久權七

重久嘉右工門 市木錦之助 有馬早右工門

深見清次郎 仁禮喜右工門 山本彦太郎

峯崎半右工門 佐藤 三次 伊藤 直次

石神万右工門 川上 周藏 藤井鐵之助

大山誠之助 土橋孝右工門 有馬藤九郎

鎌田雄一郎 橋口成一 川玉甫助

米良市之助 藤田敬助 竹下九郎

兒玉八郎 鶴田覺郎 有馬源五郎

河野主一郎 武郷衛 村田三助

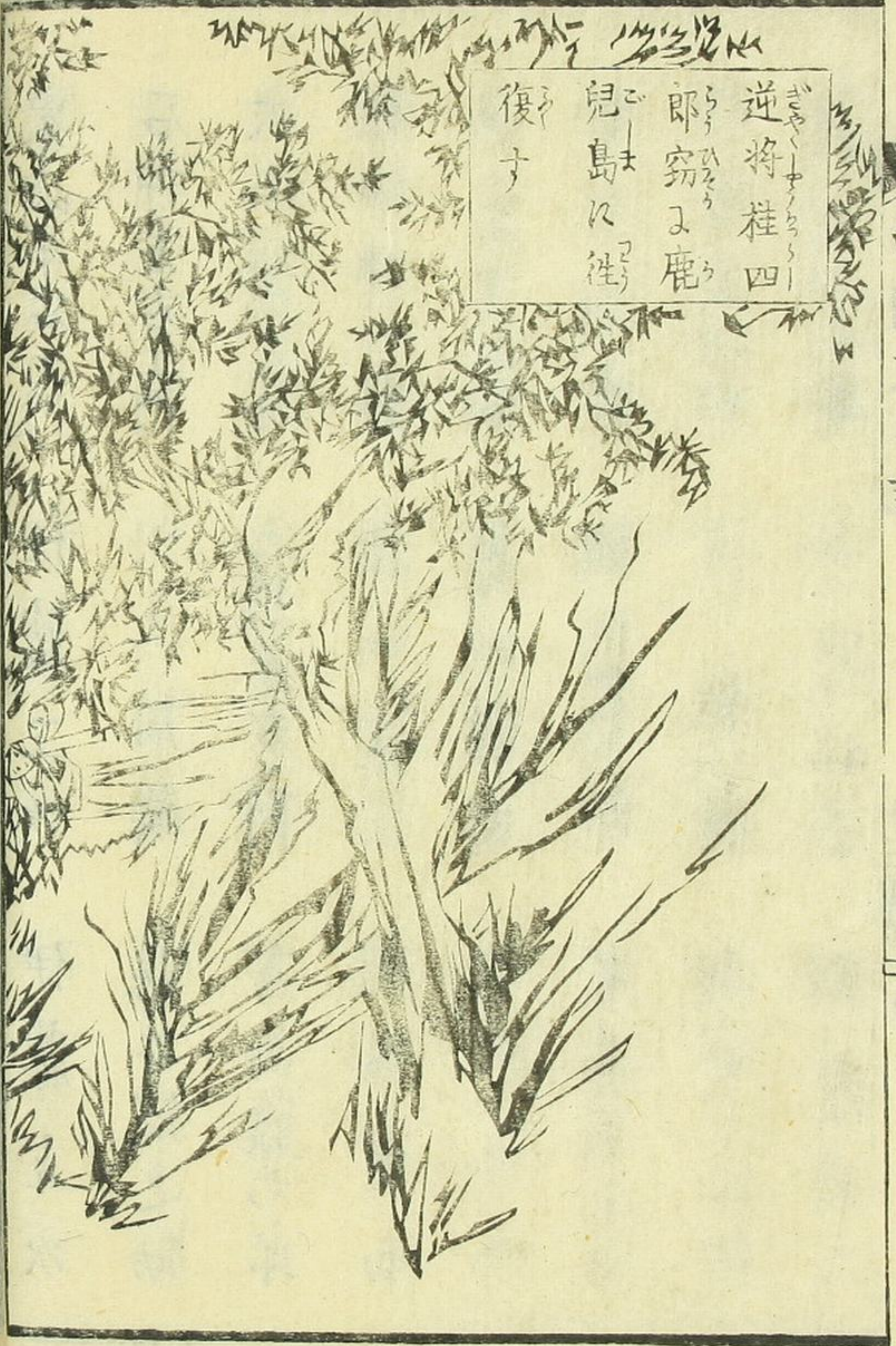
萩原正藏 倉野壯吉 淵邊彦二





西南六三巴

十三編下二五



復す 兒島に往 郎竊又鹿 逆將桂四

西南六三巴

四



兒玉軍治 有馬清藏 伊地知賢  
山口十藏 神宮司助左工門 伊集院權右工門  
德尾源兵衛 池田七熊 重久七之助  
西村清之丞 林宗九郎 村田平助  
長崎尚五郎 別府九郎 藤田武一  
漆川岳一 右川七三郎 川上芳仲  
伊集院早太郎 松元直之丞 黒田次郎右工門  
邊見十郎太 蒲生彦四郎 渡島五郎右工門

山本彦十郎 早川五郎 小山嘉太郎  
八木彦八郎 山口藤左工門 島津應吉  
郷田正之丞 高城七之丞 石橋清八  
村岡源助 田中壽之進 東郷次郎作  
相良市郎太 木藤四郎 渡島彦二  
山下彦衛 國分喜助 酒匂軍助  
川崎兵十郎 平田伊藏 牛江仲之助  
伊集院彦左工門 大山清左工門 兒玉八之進



伊地知長左衛門 塚田十左衛門 小出 健藏

以上

又鹿兒島縣下の警部巡查を察し東京より徴  
募巡查千二百人程乗り込れしと又兼て逆徒  
の輜重方より熊本に居られし桂衛門の鹿兒  
島へ歸縣し自ら縣令と稱して薩摩大隅日向  
の三州より三千人の兵を募り毎日兩度位六人  
早の早駕籠にて往來し軍令の嚴多り前より

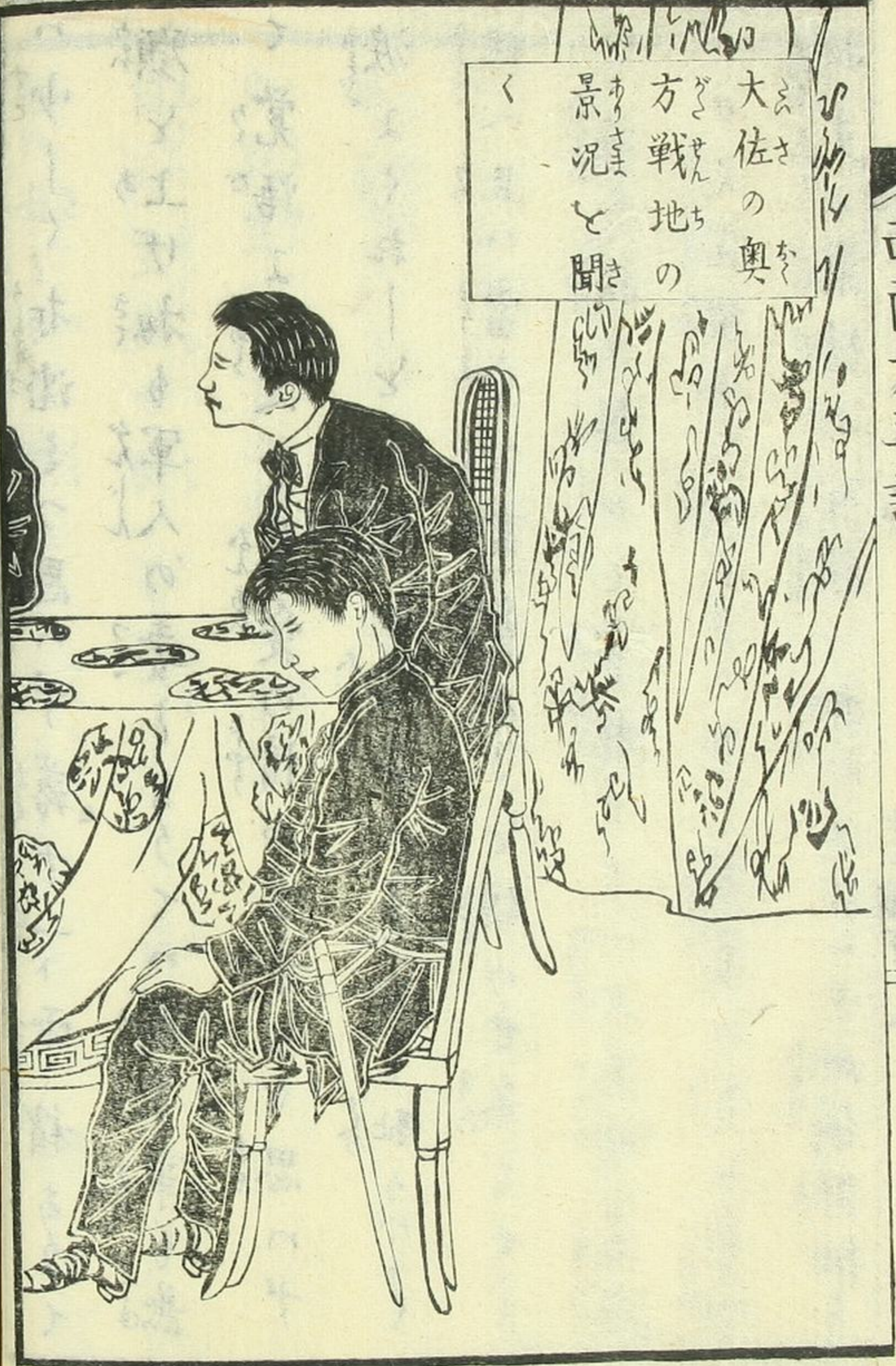
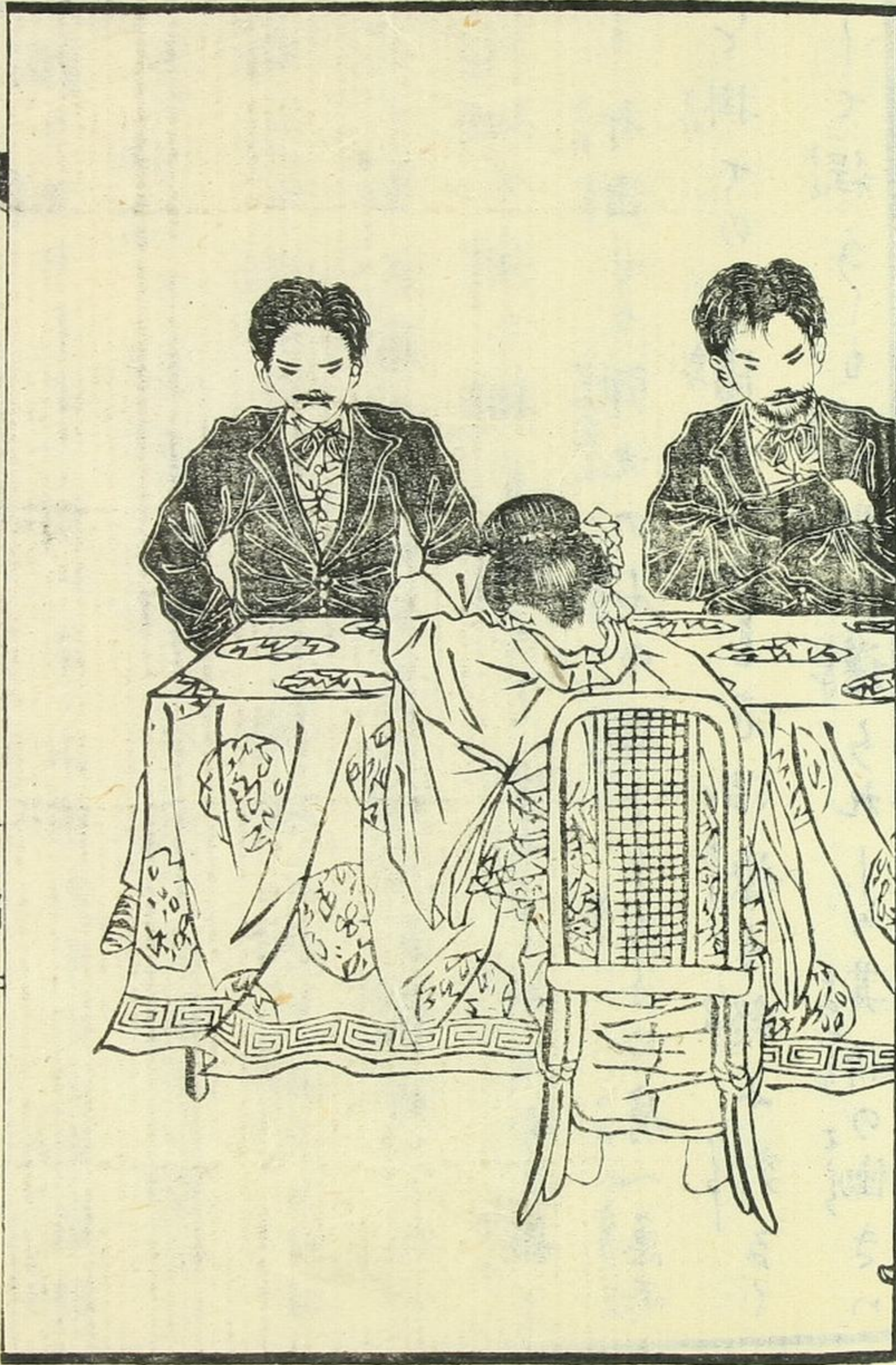
變りしころ桂を三千人の内五百人の兇徒と連  
れ高鍋街道より延岡へ出發しまゝに總督の宮の  
大山少將を先鋒として日向路へ進發され大山  
少將の都の城へ向りきたりし先頃陸軍省の  
玄關へ入來る婦人ありし是れ何事ぞと當直の  
官吏打驚き何人か女の身みて此所より來  
ると尋りし女は少も騒ぐ色なく妾の福原大  
佐の妻なるが夫の出陣せし後何の音信も



無りしが去日の戦より正しく夫の討死せしと聞  
 ども其確報を得ざるまゝ中将殿ふの嘸や知  
 り得玉ふろくんと女の身もがくも是まで参  
 りしりろく乞ふ此事を傳へよとの詞も官吏の再  
 度驚き急ぎその趣を告たるも中将どの由ま  
 の死生と妻の問ひよ来りし頃て此方へ伴ひ  
 自ら立出て語るも傷しき次第なぐり大佐殿  
 みの去る日の戦ひよ打死めされしと聞て與方

い少しく打沈まつ思はず落す一ト率稍ありて  
 顔と上げ扱も軍人の妻とありてい斯る事も無  
 て覚悟し候へと恩愛の情やる方なく思はず  
 涙よくれしと不覚と思召さまんも耻うへく  
 候へ且の當今公事多末るを煩わせ参らせし  
 と涙を拭ひ静々と會釋して一旦其場を立出  
 しが又立戻りて心せきまゝ緊要の支を尋問  
 抑まが最後の有様の如何ありしや此儀詳細く





大佐の奥  
 方戦地の  
 景況と聞  
 く



語り玉ひるよと問はるゝ不然れをよ大佐殿  
 あの日比の氣質又違はず度々の戦ひは後れを  
 取らず此日も馬をして陣頭又進め兵士を指揮  
 して勇進為し烟の下より切入る暴徒を六七  
 人切て落し猶も進んとせらるゝ折りかゝ敵よ  
 り打出せり弾丸の右の脇より左りの肩へ急所  
 を掛ての深傷ありけきを治療も終ふ効るゝ  
 して程もくも最期を遂られし其折の働きの

敵も味方も天晴の大將と目と驚馬りたる  
 程の花よりき勇戦るりしと始終を聞く奥  
 方の膝と進んで苦氣を兼ての氣質かく所々  
 んとへ存ぜし其事と承るまゝの流石は心よ  
 掛りしも今も妻も甲斐ある心地にて憂思ひ  
 も晴る計りたりと雄々しく答へられしが  
 夫の戦死と思ひやり又も其ところふ臥沈を  
 一の實み理りの歎きあり心も猛く情も深き



振舞うると有合人々も思はず袂と絞りたり  
斯てあるべきよあらざまば該省の馬車に乗て  
卯と送り帰されしと  
又横濱港の富貴樓と不割烹家ふて陸軍大  
佐福原氏の寫真の像へ膳部と備へ出入の  
者と残らず招ぎ恩と報ふ素志と各々も馳  
走し及びしと彼の熊本の市街ふへ戦争  
の爲に父母妻子の散々よありて行方も分ら

ず歎き悲しむ類ひ多くあり過る四月十八日  
の黄昏時縣の士族が多人数熊本の出町と通  
りかると年頃三十二三位の女のいとたるが  
髪に乱れ衣に破れて見るうげもるき有様ある  
の様子あらんと尋問れば女の涙をうち拂ひて  
私に此の邊の商人よて花屋治平の妻なる  
が二月十九日の大火の折二才ある子供を抱へ  
煙のりとを駈ぬけて一ト先他所へ立退て家内の



安否と兎や角と心配して待所へ夫々漸く尋ねて  
 参り兩親とあり又助ける間もなく焼死たれば其  
 歎きも何一つも持退くと叶はず是れわらさきい  
 如何しとめのと案ト暮らして居る中に敵ハ市  
 街ハ乱れ入て弾丸を運べ兵糧とと辞めを斬  
 のりせん景色も詮方なく雇われしも実ハ親子  
 ガ命とハ繫種よるらうりと心あらず十日餘  
 り働さし更し手當もなく又其内ふいと待間

も雨露を凌ぐ家さへなく殊もい数度の戦争は居  
 所立し所よもさまようて漸坪井の田畑續きハせ山  
 の中腹ハ肥と構ふ穴のあつものへ子供を抱て這ひか  
 がそ袂ハ入て有る生米よて命をつなぎ夫の安否  
 と聞よ出ら憂艱難の甲斐もなく田原坂へ通ふ道  
 で敢果るく死だと聞た後ハ力もぬけて穴の内ハ泣  
 暮し泣明すも乳もあつて子供さへ昨夜とら死  
 るもたり此世も念も残りまど死ふと覚悟致しせ





夫の安否と  
問んと憂  
苦しんで再度  
熊本よ来る





めてハ元の住居地の井戸へありとも身を投やうと  
 未練で此所迄来り一ダ四五日前より米一粒咽喉よ  
 通さぬと云ふ飢勞れてつひ行を御不審をバ受ま  
 一と始終と語るよ士族方ハ其不幸とバ慰め早  
 く由旧知事公より惠を承受けよと死とバ留めて  
 別れたりと又五月十六日又山縣參軍より報知あり  
 兇徒三百斗り豊後竹田へ襲ひ来りよよつて關き  
 難きよ付小倉營所より頼又援兵を請ひ山縣參事

の指令よて一大隊と竹田へ差向り又小倉より二百名  
 差遣一たり到着の上ハ逆情見留の上逆徒の出る所  
 不向けて討撃する為奥少佐を同所よ遣をした  
 りと去る十三日十四日ハ兇徒五百人計り宛引續き日  
 向路より繰込竹田へ向けて通行の音香川縣令より各所  
 へ報知せしと既よ云げ岡を襲ひて兇徒間道より竹田  
 警察所裁判所及び同所滞陣して本廳を襲ふ勢ハ  
 又警視局より出張の查官方長崎より其筋へ来信



の寫

去る五月三日御報知申上候後直長官の許へ  
罷出候心組の處俄に暴風強雨加ふるに雷鳴故  
に航海相成がごとく不得止今日迄滞在罷在候今  
朝不至り少く風雨穏ふ相成候に付多分今明  
日あり出帆可相成と存候扱昨日鹿兒島縣よ  
り左の四名護送として九等警部平林忠正外巡  
査八名當地へ着致候に付て該縣の形勢親

問の廉別紙の通候間不取敢上申仕猶追々  
確報を得次第可申上候早々謹言

十年五月五日

鹿兒島縣舊官員護送の分

出納第六課長箕田長億募兵方四課長一等警  
部右松祐永二課長松本武雄一課長都て事務今  
藤宏去る廿六日第三旅團二大隊凡千二百人田  
邊中佐迫田少佐が引卒熊本縣下小島より

西南本平記

十三編下十五



乗船鹿兒島縣下へ出張まべきの處船都合  
 小依り先第一大隊の乗船残一大隊の高  
 橋へ残し廿七日午前二時百貫港を出帆同日  
 午後十一時二十分鹿兒島湊に着直ち午前  
 濱より上陸本陣を潮見町濱崎左兵衛次方  
 不設く此時河村參軍大山少將高島少佐仁禮  
 大佐等第一旅團五大隊を引率上陸參軍并  
 大山少將の本營を廣口田小松邸に設け高嶋

の本陣へ松山通り重久佐次左工門方に設  
 け上陸の際巡查一中隊を斥候として揚  
 陸せしめ續て惣兵上陸直ち哨兵線を張  
 り照國神社松原を胸壁と為し夫より城  
 の山上堀の内より海岸に沿て胸壁を築き  
 悉く大砲を据此胸壁の土俵をりりて築く所の  
 瞬息ありとす此の入丈の熊本ありより  
 一と連を越したるものありし而して  
 海岸より要路を哨兵を配布す







諸も鹿兒島に在る官兵に甲突川の竹柵を嚴重  
み軍艦の大砲を陸地へ運びて要所を据つけ兇  
徒の来る候待りのか、彼もさうなくハ寄来らず  
唯山々を壘を築きて折々砲撃するのをみるが  
爰に驚くべき一事あり去る十一日の強雨にて甲  
突川も満水せし兇徒の柵を破らんとしや上流  
よりしてさぬの芥を流し下せりと番兵は是  
を防ぎて注意するに階子に男女の死骸を二三

人結ひつけて流し下せるものありハ官軍の探索  
人々或ハ官員の親族ならんや首の無きものあり  
手足無きものありて其慘酷しきもの言語もたえ  
たり又鹿兒島縣下の商人にて田邊為太郎といふ  
大商人の官軍入縣の日より陸軍の御用達とあり  
て種々盡力奔走したるや城下の者も諸方へ  
立退き今の諸品の買入なども用弁がとき位  
たあしを去る十日に召使の手代一人と諸俱よ



船よて谷山の町 鹿兒島城下より三里の方へ赴き或店  
 先よて買入物の注文などをして居るところへ  
 不意に暴徒が走せ集り取て押伏せ縄をうけ  
 手足も折よと打擲してその夜の馬小屋へ  
 籠置き翌日伊敷の本堂へ引立行て猶又嚴敷  
 責めさいると半死半生よりありてを仰向けよ  
 して両眼を扶とりかゝ支より手足を斬落し  
 胴とも寸断くは斬り棄て買物代價の拂ひ残

り八百四谷山の瓦屋山助に預け置しも皆暴徒等  
 小奪のれし其場を辛く逃去りたる彼の名使が  
 同十八日帰りに来りて語りしと直に聞しに惨酷あ  
 りさるるりしといふ又去る十三日の兇徒三百人程日  
 向路より大分縣下へ押出し谷田の警察一町と區  
 裁判所と襲ひ官吏と巡査は是をさけて死傷る  
 一兇徒はそのまゝ竹田を守ると同日八代口の巡査  
 隊が石坂迄引揚後兇徒の襲ひ来らず此夜



ハ遂つひふ石坂いしがらと捨てワタリ逆引さかひき上げたりと官軍第  
三旅團さんりゆうだんと三名侯さんめいこうよりサシキまでの間あひだも繰り込  
巡査隊じゆんさたいと連絡れんらくし修繕寺しゆせんじへ進軍の目的りやくと立て十  
四日朝暁あけがさより巡査隊じゆんさたいハ三名侯さんめいこうを距はなること  
十五六町じゅうごくちやうの所ところより戦争中せんそうちゆう尤なほも第三旅團  
ハすでに三名侯さんめいこうも繰り込こめたり又また同十八日ハ  
出水街道みづみちも官兵備くわんべいと立たしとつ  
是これより官軍大進撃くわんぐんたいしんげきを為なし竹田城たけのどのしろを始はじト

め數壘すうらいと陥おちいれ逆徒さかやくと鶴崎つるさきも向むかひ木浦きうらの両  
所ところも巡査隊じゆんさたいと激戦げきせんありつる譯わけハ第十四編  
も記載きざいすべし

西南太平記十三編卷之下終

西南太平記

十三編下

二十



明治十年六月十五日 御届  
全 十年七月十二日 出版

東京堀江町二丁目二番地

安達平七止宿

茨城縣平民

沼尻絰一郎

東京書林 賣捌人

江島喜兵衛

定價廿二錢五厘

萬笈閣製本各地專賣書籍館

江島喜兵衛

水野慶次郎	柳川梅次郎	牧野吉兵衛	中村佐助	村上勘兵衛	丸家善七	小林新兵衛	山中兵衛	稻田佐兵衛	北畠茂兵衛
山中北郎	山中孝之助	鈴木忠藏	青山清吉	朝倉久兵衛	北澤伊八	太田金右衛門	荒川藤兵衛	石川治兵衛	林萬次郎







同	同	同	同	駿	同	同	同	同	同	同	同	同	遠
				河	掛	二	見						江
	沼		靜	藤	川	侯	附						濱
	津		岡	枝									松
小	吉	廣	佐	淺	大	天	古	白	一	山	齊	松	落
公	成	瀨	藤	井	塚	井	澤	木		下	藤	家	合
浦	壽	市	俊	安	好	金	良	健	貫	仁	太	聚	浦
	三			兵	五			二		兵	兵		
吉	郎	藏	平	衛	郎	藏	作	郎	社	衛	衛	人	七
浦	同	同	同	越	同	同	同	同	同	越	同	同	同
	同	葛		後	高					中			山
	四	塚		長	岡					富			形
	谷			岡						山			
	濱												
	村												
河	佐	弦	松	中	車	川	大	中	守	土	中	平	市
浦	藤	卷	田	村		上	橋	川	川	井	川	田	村
	友	七	周	作	平		甚	甚	吉	宇	久	彌	五
	十			次	次				兵	三		平	郎
浦	吉	郎	平	平	郎	章	吾	藏	衛	郎	助	治	兵
													衛

010190507756



